

自然栽培法による農業の持続可能な経営可能性を高めるための施策

加 藤 惠 吉¹
黄 孝 春¹
内 藤 周 子¹
商 哲¹
V.カーペンター²

はじめに

本年度のプロジェクトは、これまでの研究成果を発展させる形で、自然栽培と呼ばれる無肥料、無農薬にて農業を行う農業関係者のマネジメントに注目し、調査、研究を行うものである。

本研究グループの活動は、これまで、実地調査により自然栽培の状況を調査し、その知見を基に研究を行うとともに、2022年2月に開催したフォーラム（Zoom ネット配信）では、日本全国及び海外から500名を越える多くの参加をいただき大きな成功を収めるなど実績を積み重ねてきた。

また、プロジェクトの過程で開設した自然栽培農業者向けのホームページは自然栽培農業関係者から高い評価を得ている。

本年度も、全国の自然栽培農業者及び地域社会にどのように貢献するか、研究メンバー各自の学術的観点により明らかにしていくことを目的に調査、研究を行い、毎年多くの参加者が集うシンポジウムを開催しその知見を還元する。

1. 背景と目的

本研究グループの目的は、無肥料、無農薬による自然栽培を中心とする農業生産法人等の経営に関する、生産・流通・販売等の課題に注目し、農家、農業生産法人・団体の経営マネジメントが、日本全国の自然栽培農業者及び社会に経営学的見地からどのように貢献するか、メンバー各自の学術的観点により明らかにすることである。

2015年に国連が示した目標では、少ない資源で持続可能な生産、消費ができる形態が示唆されている。この目標と密接に関連付けられる自然栽培を、経営マネジメントの側面から捉え、関係者および地域経済への貢献可能性を検討してきた。これまでの知見及び人脈を基に今年度も、弘前大学人文社会科学部地域未来創生センターシンポジウムを開催する予定で、その知見を広く自然栽培関係者と共有する。また、自然栽培関係者の経営及び地域におけるニーズに応え、ヒアリング調査・生産経営現場の訪問・調査により実際の経営事例における創意工夫を学術的な観点と組み合わせた分析を行う。

当研究グループがこれまで企画、開催してきたシンポジウムやフォーラムは、日本の自然栽培の分野では日本でも有数の参加者を誇り、経営学に類する学術面からのアプローチは他に類をみない。また、実績

¹ 弘前大学人文社会科学部

² 弘前大学人文社会科学部（客員研究員）

の蓄積によって、関係者の交流の場を定期的に提供することができ、それらの交流がプラットフォームとなり将来的に新たなビジネスへ発展することが期待される。

2. 実施内容（今年度の活動の概要）

本プロジェクト遂行に当たっては、コロナウイルス感染症の影響で調査の日程に支障が出たものの、安全対策を取った上で岡山県、広島県、関東圏3県にて調査を行った³。また、2023年1月21日に行う「弘前大学人文社会科学部地域未来創生センターシンポジウム」は、Zoom（ネット配信）に切り替えて開催し、引き続き農業従事者・関係者と成果を共有し、地域社会のアグリビジネスを下支えしていくとともに研究調査の成果を論文、報告書にまとめる。

そして、本プロジェクトを通して、自然栽培法を用いて農業を営む農業関係者が潜在需要をいかに喚起し、経営上成功できるか。また、これらの農業関係者の戦略やマネジメントを分析することでいかに供給を喚起するかという問いに応えられるように調査、分析を行い広く貢献していく。

3. 研究調査・発表

2022年度においては、当報告書締切（2023年1月10日）後も調査等を行う予定であるが12月までの調査活動を紹介する。また2023年1月21日にオンライン（Zoom）にて開催する予定のシンポジウムの趣旨およびプログラムを紹介する。

【研究調査】

- ・加藤恵吉・黄孝春、ヒアリング調査「株式会社やまと（すし遊館）（岡山県倉敷市：高橋啓一会長、高橋栄二社長、NPO法人岡山県木村式自然栽培実行委員会田辺綾子事務局長）」2022年5月27日
- ・加藤恵吉・黄孝春、ヒアリング調査「すし遊館あさひLECT店」（広島県広島市：石崎勝人取締役常務・店長）」2022年5月28日
- ・黄孝春・加藤恵吉、ヒアリング調査「渋谷農園（埼玉県富士見市：野菜自然栽培農産物しぶや野菜渋谷正和様）」2022年6月18日
- ・黄孝春・加藤恵吉、ヒアリング調査「十勝幌尻農場（北海道帯広町：山口富嗣社長、澤田朋美農場長）」2022年6月24日
- ・黄孝春・加藤恵吉、ヒアリング調査「株式会社陽虹舎（北海道積丹町：亀川久美代表取締役）」2022年6月25日
- ・黄孝春・加藤恵吉、ヒアリング調査「木村秋則自然栽培農学校仁木農場（北海道仁木町、武田様）」2022年6月26日
- ・黄孝春・内藤周子・商哲、ヒアリング調査「ナチュラルハーモニー、成田生産者組合（千葉県八街市、森下あゆ美様）」2022年12月4日

上記のインタビュー調査を基に、査読誌等への投稿、最終著作物の出版へ向け今後、本研究グループ各自が研究を進めていくことになるが、特に上記から2つピックアップして概要を述べる。

- ・2022年5月に行った回転すしチェーン株式会社やまと（すし遊館）の調査においては（写真1）、無農薬・無肥料にて栽培した安全、安心な自然栽培で作ったコメをシャリに取り入れることと、本来原価率が高く、呼び水商品として位置づけられる、まぐろについて生の本まぐろ1頭買いを行うことで、これまで使うことのなかったまぐろの部位をネタに使うことで、まぐろ全体の原価率を引き下げることに

³ 3. 研究調査・発表参照

成功した。

また、スシロー、くら寿司、かっぱ寿司など大手回転すしチェーンの低価格競争に参入することなく、比較的高価格帯で事業展開する経営に移行し、他店との差別化戦略を行うことで成功を収めている。

- ・2022年6月に行った北海道積丹町の株式会社陽虹舎では、亀川久美代表を始めスタッフが女性のみで事業展開する。陽虹舎では自然栽培の野菜を販売するとともに、加工物も生産し特に濃厚な自然栽培のトマトジュース（写真2）等が好評を得ている。また、設備・機械等の修理や点検もできるだけスタッフのみで整備できるようなスキルも身につけるなど創意工夫した上で生産、販売、加工等の事業経営を行っている。



（写真1）「すし遊館：LECT 店訪問調査」



（写真2）「陽虹舎：自然栽培の加工商品」

【研究公開シンポジウム】

2023年1月21日のシンポジウムでは「自然栽培に関する研究発表」と「野菜の自然栽培における技術と経営」をテーマに研究発表と農業者の方の講演の2部構成でZoom（ネット利用）にて弘前大学から全国に発信する（次頁のプログラム参照）。

「自然栽培に関する研究発表」では、当研究グループの加藤、黄が研究成果の報告を行う。

「野菜の自然栽培における技術と経営」においては、日本各地で生産、販売等を行っている自然栽培農業者が講演を行いそのノウハウやこれまでの知見をご披露いただく。

このような取り組みや成果を発表することで、自然栽培に携わる関係者及び、関心のある方々と情報を共有する機会とし、農業関係者、研究者、その他の参加者の知見や関心を深めていく。

4. おわりに

以上、当プロジェクトに関しては、2023年度以降も継続し、シンポジウムやフォーラムの開催やインタビュー調査を引き続き行う予定である。

今後は、これまでの活動に加え、さらに各地の自然栽培に関する農業生産者のインタビュー調査を基にした研究を続けるとともに学会等での発表及び自然栽培を通じた食と農業の持続可能な発展と地域づくりのために、当研究プロジェクトメンバーの学識を基に、自然栽培に関わる農業者及び農業法人等の事業者の経営課題についてさらに研究を進展させていく。

令和4年度 弘前大学 人文社会科学部 地域未来創生センター シンポジウム

弘前大学人文社会科学部自然栽培研究グループのシンポジウムを行います。

今年度は「自然栽培に関する研究発表」と「野菜の自然栽培における技術と経営」をテーマに2部構成でお送りします。

経営学的視点からの自然栽培に興味のある方はふるってご参加下さい。

日 時 令和5年1月21日(土) 15:00 ~ 18:00
場 所 Zoom 開催・参加無料(定員300名)

プログラム

15:00~15:05 総合司会 内藤 周子 弘前大学人文社会科学部 准教授
開会の挨拶
飯島 裕胤 弘前大学人文社会科学部 学部長

第1部 自然栽培に関する研究発表
15:05~15:30 「自然栽培米を用いた差別化戦略 —すし遊館の事例—」
加藤 恵吉・黄 孝春 弘前大学人文社会科学部 教授
15:30~15:55 「自然栽培はどこまで普及できるのか」
黄 孝春 弘前大学人文社会科学部 教授

15:55~16:00 休憩 5分

第2部 野菜の自然栽培における技術と経営
16:00~16:25 「自家採種から見えてくる自然栽培」
関野 幸生 関野農園
16:25~16:50 「土を知り、野菜を知り、技術を磨く」
渋谷 正和 渋谷農園
16:50~17:15 「できる品目と売れる品目」
小黒 裕一郎 小黒農場
17:15~17:40 総合討論
17:40~18:00 講 評
木村 秋則 木村興農社

参加申込先：<https://shizensaibai.org/>

申込締切り：令和5年1月15日(日)

締切後、サイトから参加を申し込んだ方に、Zoom URL をご送付致します。
当研究グループは2021~22年度に公益財団法人牧誠財団研究助成を受けています。